

ひだかがわいりあいざくら

## 日高川入相花王

### 渡し場の段

こゝは紀の国日高川、清き流れも清姫が松吹く風に誘はれて、只さへいとゞ物凄し

女心の一筋に脛もあらはにやうくと、日高の川をここかしこ

「安珍さまいなうく、我が夫なう」

と駈け廻り、呼べど叫べど松風の他に答ふるものもなき

はや山の端にさし昇る隈なき夜半の月影は、昼を欺く如くなり

かすかに見ゆる川岸の、もやひし舟に

「ハアゝ嬉しや、こゝは日高の渡し場、これを越ゆれば道成寺へ間もなし、

渡り頼まん急がん」

と川の汀に立ち寄りて

「なうその舟早う渡してたべ、渡し守どの、渡し守どのいなう、コレなう

く」

と呼ぶ声も枯野の秋の舟ならで、渡りかぬるぞ甲斐もなき

寝耳にふつと舟長は苦押しのけて仏頂面、

「エゝ何ぢや、喧しいわい。夜々中がやくくと、『早うく』のその声で、

あつたら夢を取り逃がしたわい。夜が明けたらば渡してやらう、エ、コレ  
マよう寝ている者を、アタ鈍くさい」

とつかうどに顔をしかめてつぶやけば

「なう自らは道成寺へ急ぐ者、早うこゝを渡してたべ、早う〜」

「エ何ぢや、とじょう鱈汁が食ひたい、アハ、ハ、ハ、テモいやしい奴じやわい、

ハ、ア聞えた、コリヤ何じやな、宵に渡した山伏殿の後追うてきたおなご女子ぢ

やな、エ、それなればなほ渡されぬ、ならぬ〜」

とにべもなき

詞に姫は涙声

「エ、そりや胴慾ぢや〜〜わいなう、親の許したわが夫を余所の女子

に寝取られて、何とこのまま帰られう、不憫と思ふて渡してたべ、慈悲ぢ

や情ぢや、聞き分けて」

と頼みつかこちつ手を合せ、嘆き沈むぞ哀れなり

こなたはなほも空吹く風、

「ム、それほど頼むなら渡してやらう、と云ふたらよからうが、マアいや

ぢや〜。おりやあの山伏に縁もなし、また由縁ゆかりもなけれど、渡されぬと

いふ訳を耳をさらへてよう聞けよ、われが尋ねる山伏殿の頼みには『様子

あつて某は道成寺へ逃げ行く者、十六七の女が来たら必ず渡してくれるな』

と、小金こがねくれて頼まれたれば、金の冥利でこの川を渡すことはならぬわい、  
寒気をしのぐ山伏の八重一重か板一枚、下は地獄のこの商売みすぎ、頼まれたら  
ば男づく、いつかな渡さぬ、マアならぬ、われもまたどれほどに焦こがれて  
も及ばぬ恋ぢや、役にも立たぬ顎あごきかずと、足元の明い内とつと去ね  
く、エ、うぢうぢとうぢついて棹の馳走を食らふか」

と慈悲も情もなか／＼に渡す気色もなかりける。

姫はあるにもあらればこそ、

「エ、聞えませぬ／＼安珍さま、恨みはこつちにあるものを、かへつてこ  
の身に恥かゝされ、何と存ながららへられうぞいなう、今日とても父上の御意  
見、ご尤もとは思へども女は一度わが夫と思ひこんだら魔王でも、たとえ  
鬼でも変化でも可愛いといふ輪廻は離れず、まして五月の宮詣にふつと見  
染めしその日より、愛し床し恋しいと夢現にも忘れかね、焦がれ焦がるゝ  
恋人に逢ふて嬉しい言の葉を語らふ間さへ情けなや、恋の呵責に砕かれて  
身は煩惱に繋がるゝ、紅蓮の氷、大焦熱阿鼻修羅地獄へ落つるとも、思い  
きられぬ安珍様、聞こえぬわいな」

と身をもだへ『わつ』とばかりに声を上げ、嘆く涙の雨車軸、その名も高き紀  
の国や、日高の川に水増して堤も穿うがつごとくなり。泣く目を払ひすつくと立ち、

「エ、妬ねたましや腹立ちやナ、思ふ夫を寝取られし恨みは誰に報ふべき、たと

へこの身は川水の底の藻屑となるとても、憎しと思ふ一念のやはか晴らさ  
でおくべきか」

と心を定め身繕ひ、川辺に

立寄り水の面、写す姿は大蛇の有様

「さては憎気嫉妬の執着心、邪心執念いや勝り、我は蛇体となりしよな、

もはや添はれぬわが身の上、無間奈落へ沈まば沈め、恨みを云ふて云ひ破  
り、取り殺さいでおかうか」

と怒りの まなじり 眦、齒を噛み鳴らし、辺りを睨んで火焰を吹き岸の蛇籠もどろく

と青みきつたる水の面、ざんぶとこそは飛入つたり。

舟長見るよりわな々き声

「鬼になった、蛇になった、角が生えた、毛が生えた、食ひ殺されては叶

はじ」

と跡をも見ずして一散に、飛ぶが如くに逃げてゆく

不思議や立浪逆巻きて、憤怒の大頭角 だいがず 振立て、髪も逆立つ波頭抜き手を切つて

渡りしは怪しかりける